

---

# 保育園の先生

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

保育園の先生

### 【Nコード】

N6006Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

淳博が登下校に通リ掛かる保育園。そのの先生を見るとかなり奇麗で。一目惚れした彼が取る行動は。保育園の先生も奇麗な人が多いです。

## 第一章

### 保育園の先生

その保育園は通学路にあった。だから毎日その傍を通りかかる。

「懐かしいな」

「そうだよな」

そこを通る中学生の生徒達はかつて保育園に通っていた。彼等にとっては母校であるのだ。だからそこを通る時には笑顔になることが多かった。

それは前川淳博も同じであった。彼はその保育園を見て笑顔になつていた。

「昔あのプールで泳いだよな」

「ああ、あのプールか」

隣にいる昔からの友人が彼のその言葉に頷いていた。見れば保育園の広いグラウンドの一角に水色の場所がある。子供用の小さいプールだ。

「あそこでだよな」

「先生達に手を握ってもらつてな」

「だったよな。それにな」

友人は今度は滑り台を見ていた。他の遊ぶ器具もある。赤や青。黄色といった派手な色でペンキで塗られている。子供が喜ぶように派手にしているのだ。

「あの滑り台でも遊んだよな」

「だよなあ。校舎の中でもな」

校舎は二階建てだ。そこに幾つか部屋がある。渡り廊下の手すりも奇麗に塗装されている。何もかもが子供に合わせた色になっている。

「遊んだよな」

「先生達もいい人達ばかりだったしな」

「そうそう」

二人で思い出の話をしていく。

「ただな」

「ああ、年配の人ばかりだったからな」

「何でなんだ？あれは」

「このことも話すのだった。」

「あれって」

「さあな。何でかな」

友人は淳博のその言葉に首を捻った。

「あれは」

「今は違うかな」

友人はふとこんなことも言った。

「今は」

「どうか。綺麗な人いたらいいけれどな」

「そうだよな。若くて綺麗な人な」

「いるかな」

そつと覗く。見れば今は子供達はいない。保育園が終わるのは早いのだ。

それで先生達もいないかと思われた。しかしであった。

校庭にだった。赤や緑のジャージを着た若い女の人達が出て来た。

そうしてその校庭をトンボやローラーで整地しはじめたのである。

「あれっ、皆若いな」

「そうだよな」

淳博も友人もそれを見て言う。

「先生達かわったんだな」

「そうみたいだな」

「まあよく考えたらな」

ここで友人が腕を組みながら述べた。

「俺達が卒業してもう八年か」

「中二になっただけだからな」

淳博も年月について話した。

「もうそれだけなるよな」

「だったら先生が皆かわっても当たり前か？」

友人は言った。

「やっぱりな」

「そうなるか」

「ああ、そうなるか」

今度はこう述べたのだった。

「八年って長いしな」

「その間に先生が全員交代して」

「今はああした若くて綺麗な先生達だ」

その校庭を整地している先生達である。どの先生達もかなり若い。しかも美人揃いだ。二人はそんな先生達を見て顔をうっとりときえさせていた。

そうしてだ。淳博はだ。

「特にな」

「どうした？」

「あの先生よくないか？」

先生の中の一人を見ての言葉だ。見れば淡い茶色の髪を左右で赤いリボンで束ねた人だった。目は大きくはつきりとした顔をしている。先生だが何処か幼さも残している顔である。赤いジャージのズボンの上は白いティーシャツだがそこから胸がはつきりと出ている。その先生が明るい顔でいたのだ。

「あの先生な」

「あの人か」

「一番美人だろ」

こう友人に言うのだった。

「あの中でもな」

「まあそうかな」

友人の言葉は今一つはつきりしないものだった。

「確かに綺麗な人だよな」

「そうだよな。いけるよな」

「御前って年上趣味だったんだな」

友人は彼の顔を見てこんなことを言った。

## 第二章

「そうだったんだな」

「そうか？」

「だって相手完全に年上だぞ」

彼等は中学二年である。それに対して保育園の先生となれば誰がどう考えても年上である。このことは最早絶対のことですらあった。

「それでか」

「幾つ位年上かな」

「俺達が十四だろ」

中二としての年齢である。

「それで向こうは最低短大、それが大学出てるからな」

「二十一、それが二十三」

「もつと上かもな」

「かなり年上か」

「それでもいいのかよ」

少し真剣な顔で彼に問うのだった。

「七か十離れていてもな」

「綺麗だよな」

これが彼の返答だった。

「それでも」

「ああ、綺麗だよな」

「そりゃ歳の差は気になるぞ」

それはだというのだった。

「けれどそれでもな」

「気になるか」

「ちよつと行って来る」

しかも急にであった。彼はこんなことまで言い出してきたのだった。

「ちよつとな」

「行つて来るつてまさか」

「あの人と話してくる」

まさに思い立つたら、であつた。彼は止まることはなかつた。

「それじゃあな」

「本気かよ」

友人はそんな彼の横顔を見て呆れた顔になつていた。

「本気で今から行くのかよ」

「あんな綺麗な人いないだろ」

こつした時に多くの人間が言う言葉だ。

「だからな」

「やれやれ、何か凄い展開になつてきたな」

「それじゃあ行つて来る」

もう淳博は止まらなかつた。そうしてだつた。

保育園の中に入つてだ。彼は校庭の方に向かつた。

丁度先生達は整地を終えて校舎に戻ろうとしているところだつた。

そこだ。

「あの」

彼はその先生の前に来た。近くで見るとそれ程大きくはなかつた。背は大体一五五程度だつた。一七〇ある淳博と比べて小さかつた。

しかし胸は大きい。シャツの上からはつきりと浮き出ている。だが彼は今はそれをあまり見ずにそのうえで彼女と正対して言ったのだつた。

「いいですか」

「ふえ？」

これがその先生の言葉だつた。

「私ですか？」

「はい、貴女です」

何処か固まつている言葉だつた。

「いいですか」

「何でしょうか」

「周りにいる他の先生達は目に入っていなかった。今はその先生だけだった。」

「あの、御名前は」

「和久井清里愛です」

「彼女は彼に問われるまま名乗った。」

「この保育園で先生をしています」

「和久井先生ですね」

「はい」

「彼の問いにまた問われるまま答えた。」

「それが何か」

「僕は大広淳博といます」

「大広さん？」

「はい、よかったです」

「最早勢いだった。若さ故の蛮勇と言ってもいい。」

「僕と交際して下さい」

「ふえ!？」

「先生はまたこの言葉を出してきた。」

### 第三章

「交際、ですか」

「はい、御願いします」

「こう彼女に言うのだった、

「僕でよかつたら」

「貴方とですか」

「是非。御願いします」

彼にとつては断わられることは頭の中になかった。まさに闘牛の牛の如く突き進む。やはりこれも若さ故のものであった。

しかしそれがだ。この時は功を奏した。先生はにこりと笑った。そうして。

「はい」

「いいんですか」

「私でよかつたら」

「これが先生の返答だった。

「こちらこそ御願いします」

「そうですか」

「驚いていますけれど」

「ここでは苦笑いになる先生だった。

「それでも」

「それでも。いいんですね」

「だって。私のこと好きなんですよね」

「はい」

淳博は焦ったような顔で頷いた。

「その通りです」

「それならです」

「また笑顔で話す先生だった。

「宜しく御願いします」

「よかった……」

酷薄が受け入れられてだ。淳博は思わずこう言った。

「感無量です」

「そんな、大袈裟ですよ」

「いえ、本当に」

泣きそうな顔になって言葉を返す。

「僕、死んでもいいです」

「そこまで、ですか」

「はい、そこまです」

淳博は言った。

「本当に嬉しくて」

「それじゃあですね」

そんな淳博に対してだ。先生は落ち着いたものだった。この辺りに年上の女の人の余裕があった。その余裕のまま彼に話す。

「まずはですね」

「はい、まずは」

「携帯のアドレス教えてくれますか？」

まずはそこからだった。

「それとメールも」

「それですか」

「はい、それで連絡を取り合いましょう」

穏やかな笑顔での言葉だった。

「いいですか、それで」

「あっ、はい」

ここで現実に戻った彼だった。

「そうですね。それじゃあ」

「まずはそれからですから」

連絡を取れるようにならないとどうしようもない。そういうことだった。

こうして二人はお互いの携帯のアドレスとメールアドレスを交換

し合った二人の交際はここからはじまりまずは穏やかなスタートであつた。

少なくとも先生はそうだった。だが淳博は。

「やったやった」

「まだ喜んでるのかよ」

「あれから三日だつていうのによ」

「そんなに嬉しいのかね」

「ああ、嬉しいよ」

実際にそうだというのだった。クラスで友人達に対してはしゃいでいた。

「彼女ができたんだぜ」

「彼女なら俺もいるぜ」

「俺もな」

「俺もだ」

周りの言葉はクールなものだった。

「同じじゃないのか？」

「そうだよな」

「彼女がいるからな」

「それでも違つんだよ」

彼はあくまでこう主張するのだった。

「それがな」

「何処がどう違つんだよ」

「俺達とどう違つんだよ」

「そこんところはどつなんだよ」

「凄い美人さんなんだよ」

ここが違つというのだった。

「もうな。奇麗で可愛くて胸も大きくて小柄で髪の色も長さもヘアスタイルもさ」

「つまり全部こいつのツボにはまってるのか」

「そういうことだな」

周りは彼ののろけからそれを悟った。

「しかしここまでいくか」

「もう完全にお熱だな」

「体温計りたいな」

「あんないい人いないぜ」

周りの言葉をよそにのろけ続けている。

## 第四章

「優しくても気も利くしな」

「ああ、そうかいそうかい」

「もう勝手に言ってる」

「聞いてはやるからな」

「ああ、悪いな」

皮肉も通じなくなっていた。

「それじゃあな。今度はデートだからな」

「デートねえ」

「それも嬉しいんだな」

「滅茶苦茶嬉しいな」

淳博は今にも空に浮かばん限りだった。とにかく浮かれまくっている。

「それでデートだけねどな」

「ああ、デートな」

「何処をデートするんだ？」

「公園な」

そこだというのだ。

「そこに二人でな」

「公園って駅前のあそこか」

「あそこだよな」

彼等は公園と聞くとそこが何処の公園かすぐに察した。彼等にとつて公園といえばまさにそこだった。だからそれでわかったのである。

「あれか？保育園から公園か」

「そこまでか」

「そこまでだよ。じゃあ行って来るからな」

「ああ、楽しんで来い」

「馬鹿な真似するなよ」

「振られるなよ」

こんな話をしてだ。そのうえでそのデートに向かう。彼は先生と保育園の校門で待ち合わせをしてデートをはじめた。その道すがらだ。

先生は薄い生地の空色のひらひらしたロングスカートに白いブラウス、それとクリーム色の鞆という格好だった。淳博は当然ながら中学の学生服である。

その先生がだ。彼の横から問うてきた。

「あのね」

「はい」

「確か淳博君って十四歳よね」

その年齢を問うのだった。

「そうだったわよね」

「はい、そうです」

自分の左横から顔を向ける彼女に対して答えた。

「中二です」

「そうかあ。それなら」

先生は彼のその返答を聞いてだ。顔を正面にやってそのうえでその顔を少し上にやってだ。それから自分のことを言うのだった。

「七つ違いね」

「七つですか」

「私短大出てすぐだから」

「短大なんですか」

「そうなの、二十一よ」

その年齢も話すのだった。

「二十一歳なのよ」

「年上ですよ」

「うふふ、最初からわかってることだけね」

「年上ですか」

「私から見れば年下ね」

先生は彼に顔を戻して微笑んできた。

「それも結構離れてるわよね」

「そうですね。けれど」

「私のこと好きなのよね」

「はい」

このことはこくりと頷いて答えるのだった。

「それは」

「私誰かと付き合ったことないけれど」

「えっ、そうなんですか」

「お父さんとお母さんが厳しくて」

ここから古典的な話になった。淳博も聞いたことのあるようなだ。

「それで学校を卒業するまではね」

「交際は駄目だっていうんですか」

「そうよ。それにね」

話はまだ続くのだった。先生の言葉がさらに出される。

「交際する人とはね」

「交際する人とは」

「一緒になれって」

先生はここで顔を少し俯かせた。正面にもなっている。

## 第五章

「そう言うから」

「一緒ってことは」

「生涯の伴侶よ」

それだというのだ。

「そうした人と一緒になれって」

「ってことは」

「今十四だから四年後ね」

男が結婚できるのは十八からだ。法律ではそうになっている。

「その時ね」

「あの、それって」

「いいかな」

完全に先生のペースであった。

「私で」

「あの、それじゃあ僕は」

「御願いな」<sup>6</sup>

今度は有無を言わせぬ口調だった。

「これからね」

「はあ。これからですか」

「お金は私が出せるから」

「お金って」

「十八で結婚してそれから」

話していく。やはり先生のペースである。

「大学行くつもりよね」

「できればですけど」

「大学生になったら同居できるしね。生活費は私が出せるから」

「同居って」

「二人でアパート借りて。それで一緒に暮らして」

先生は将来のことを勝手に話しはじめた。何処か夢見る顔だ。

「大学出たら共働き。けれど子供も二人欲しいし」

「子供……」

「これから御願い」

淳博に顔を向けての言葉だ。

「それでいいわよね」

「交際ってそんなところまでいくんですか」

淳博は先生の話最後まで聞いて述べた。

「結婚まで」

「そうよ。だつて人って夫婦になってからが本当のはじまりじゃない」

「はあ」

「だからよ。交際したら結婚しないとね」

「どうしてもですか」

「そう、どうしてもよ」

そのことは変えられないといった口調だった。

「結婚までね」

「結婚、ですか」

「考えたことはあるかしら」

「いえ、そんな」

慌てた顔で顔を横に振る。振り切れそうになるまでだ。

「そんなことはとても」

「考えたことはないのね」

「一度もですよ、そんなの」

言葉もだ。慌てたものになっていた。

「結婚だなんて」

「高校卒業まで待つてるから」

「結婚をですか」

「卒業したらね。結婚しましょう」

「卒業したら」

「待つてるから。その間ずっと二人でね」

「交際は、ですか」

実は彼は交際までしか考えていなかった。しかし先生はというと結婚、そしてそれからも考えていた。実に大きな違いであった。

「続けてですね」

「そうよ。四年の間は結婚じゃなくて交際よ」

「そして四年が経ったら」

「ずっと一緒にいましょう」

先生はこつも言ってきた。

「それでよかったですか」

「交際ですか」

「どうかしら、それで」

ここまで話したうえで問いだった。

「それでよかったですか」

「あの」

淳博にとつてはとんでもない話だ。何しろ彼はまだ十四だ。それでこんなことを言われてはだ。戸惑わない方が不思議なことだった。

## 第六章

それでどう言っているかわからずだ。こう言うしかなかった。

「それならですけれど」

「それなら？」

「待つてくれますか？」

顔を正面にやっつての言葉だ。

「ここは」

「待つて欲しいのね」

「はい」

先生に対して告げた。

「少しだけでいいですから」

「それからなのね」

「結婚するかどうか」

十四だ。だがそれでも真剣に考えて述べた。

「決めさせて下さい」

「いいわよ。それじゃあね」

「必ず返事しますから」

「ええ、じゃあ次に会うその時にね」

「御答えします」

今はこう言うことしかできなかった。しかしである。

彼はそれから友人や両親にあれこれと相談した。まず友人達はこ  
う言うのだった。

「また随分な話だな」

「いきなり結婚か」

「交際からか」

「こんなのはじめてだよ」

彼は戸惑いながら友人達に話した。

「俺は十四で先生は二十一でな」

「七歳上な」

「ちよつとばかり離れてるよな」

「俺が十八になったら先生は二十五か」

その時の年齢も話す。

「どうなんだろうな」

「年齢差もだけれどな」

「結婚まで言うか」

「何か凄いな」

「どうすればいいんだ？」

彼は腕を組んで言った。

「結婚してくれってというのはな」

「どうなんだろうな」

「そうだよな」

友人達はだ。ここまで話を聞いても戸惑うばかりだった。

それでだ。結果として彼等はどう答えていいのかわからなかった。

彼に対してこれといったアドバイスをすることはできなかった。

「まあここはな」

「考えたらどうだ？」

「なあ」

こんな返答だった。

「御前結婚したいか？」

「それはどうなんだ？」

「そりゃ将来はな」

淳博にしてもこう答えるしかできなかった。

「けれどその将来ってな」

「遠い未来だよな」

「そうだよな」

「ずつと先だよな」

「ああ、先だよ」

実際そうだと答えた。

「そんなのな。先って考えてたよ」

「それじゃあ交際止めるか？」

「別の相手と」

「けれどそれもな」

こう言われてもだった。彼も返答に窮した。

それでだ。彼は言葉を選びながら述べた。十四という若さだがそれでもだ。

「そうだな」

「どうするんだ？」

「それで」

「じっくり考えるよ」

これが今の彼の返答だった。

「ちよつとな」

「じっくりか」

「考えるっていうのか」

「ああ、今はな」

こう言うしかできなかった。

「そうとしか言えないし考えられないしな」

「けれど次に会う時にだろ？」

「返答するんだろ？」

だが友人達はこのことを指摘してきた。

「その時に」

「そうなんだろ？」

「ああ」

その通りだと。淳博は頷いて答えた。

「そうなんだよな」

「じゃあどうするんだよ」

「もうすぐだろ？」

友人達の言葉はかなり身が入っているものになっていた。

## 第七章

「その時にな」

「どう答えるんだ？」

「どうしたものかな」

「ここに至って迷いを見せてしまった。

「本当にな」

「返答は出すしかないしな」

「そうだよな」

それは絶対であった。彼等が言うまでもない。

「それじゃあ一体」

「どうする？」

「その時まで時間がないぞ」

「とりあえずな」

「ここだ。彼は言った。

「俺が思うことをありのまま言っよ」

「御前のか」

「ありのままをか」

「ああ、言っ」

「こうはつきりと言った。

「あの人にな」

「じゃあそうしろ」

「それが一番いいって思うんならな」

「俺達はそれに反対しないからな」

友人達は彼の言葉にその本心を見た。それならばと。彼等もまた  
頷いてそのうえでだ。彼に対して告げたのである。

「いいな、御前の心をな」

「ぶつけるんだ」

「そうするよ」

彼は決意した。両親との話もそんな風であった。ただし両親は彼に対してこんなことも言ったことが違っていた。

「いいか、それならだ」

「このことは忘れるのよ」

こう我が子に対して言う。家の食事のテーブルにそれぞれ座ってだ。そのうえで家族会議において告げるのだった。

「歳の差のことはな」

「それはね」

「それはなんだ」

このことはだ。彼にとっては意外だった。まず反対されるなら歳の差のことだと考えていたからだ。しかしそれは違っていたのだ。

「それはいいんだ」

「そんなこと関係あるものか」

「そうよ」

両親は強い言葉で告げた。

「お父さんとお母さんだってな」

「七つ違いよ」

二人もだというのである。

「お父さんの方が年上だけけれどな」

「それが逆になっただけじゃない」

「それだけなんだ」

そう言われるとだった。意外な顔になる彼だった。

「歳の差って」

「世の中十歳以上離れている夫婦だってあるんだぞ」

「それも普通なのよ」

「大事なことじゃないんだ」

「そんなことよりもだ」

「大事なことがあるわよ」

両親は回り道をしなかった。ずばり核心を突いて話をしていった。  
「それは心だ」

「それよ」

「心……」

奇しくか当然のことか。淳博自身が友人達に言ったことがそのままだ。両親の口から彼に対して話されたのである。

「心なんだ」

「そうだ、心だ」

「あんたの心よ」

それだというのである。

「その人に対してどう思っているか」

「そのことが大切なのよ」

「そうなんだ」

それを聞いてだ。淳博は考える顔になっていた。そうしてだ。彼は両親に対しても言った。

「それなら」

「ああ、それなら」

「どうするの？」

「俺のありのまま思っていることを言っよ」

やはり言っつのはこのことだった。

「それをさ」

「そうするか」

「それでいいのね」

「ああ、そうするよ」

また言っつてみせた。

「それが正しいかどうかわからないけれどね」

「そうか。じゃあそうしろ」

「それが一番と思っっているのならね」

「どうなるかわからないけれどそれでもね」

また言っつ淳博だった。

## 第八章

「あの人に話すよ」

「そうしろ」

「後に悪いものが残らないようにね」

こうして、であった。彼は決めた。そうしてそのうえで先生と会った。そのうえで彼が思っていることをそのまま告げたのだった。

「あの」

「返答よね、あのことの」

「はい、あのことへのです」

まさにそれであった。真剣な面持ちで話す。

「御答えさせて頂きます」

「わかったわ」

先生も彼のその言葉を受けて真剣な顔になる。

「それじゃあそれは」

「見させて下さい」

こう先生に言うのだった。

「先生のこと。もっと」

「私のことを？」

「はい、御願います」

これが彼の先生への言葉だった。

「そのうえではっきりと答えさせて下さい」

「それが返答なのね」

「はい」

こくりと頷いてもみせた。

「そうです。今はです」

「答えるのは今じゃないのね」

「先生のことまだよく知りません」

付き合っって短い。そのことに気付いたからだ。

「ですから。よくわかってから」

「そのうえで返事をくれるのね」

「一生の問題です」

言葉は真摯なものだった。

「それで気軽に短く考えて答えるなんてことは」

「そうよね、できないわよね」

「俺まだ中二ですし」

このことも話した。

「それに馬鹿ですけれど」

しかしだ。それでもだというのである。

「けれど。それでもこうしたことは」

「すぐに答える訳にはいかないっていうのね」

「そうです。ですから今はまだ」

「答えないで。それで私を」

「見させて下さい」

先生の顔をじっと見詰めたうえで言った。

「そして先生が完全にわかったその時に」

「返事。くれるのね」

「それで駄目ですか？」

今度はその目を見詰めて問うた。

「それじゃあ」

「いえ」

彼のその真摯な言葉にだ。先生ははじめて微笑んでみせた。それからその微笑みと共にゆっくりと話してみせてきた。

「いいわ」

「いいんですね」

「私もまだ貴方のことはよく知らないから」

「だからですか」

「若しもよ」

ここからも話してみせてきた。

「この場ですぐに答えてきたらね」  
「その時は」  
「ひっぱたいていたわ」  
「これが先生の返答だった。」  
「イエスでもノーでもね」  
「そうなんですか」  
「そうよ。お互いまだよく知らないじゃない」  
「はい」  
「それで決めるなんてことをしたらね」  
「その場合はというのであった。」  
「ひっぱたいていたわ」  
「ひっぱたかれてましたか」  
「そんな大事なことを短い間に決められないでしょ」  
「はい、それは」  
「それを決めたなんて言える人はね」  
「そうした人間はどうかとも話すのだった。」  
「詐欺師とかいい加減な人に決まってるから」  
「そうした人にはですか」  
「一緒にはいられないわ。だからよ」  
「そうですか。それで」  
「けれど淳博君は今言ってくれたわね」  
「ここまで話してあらためて淳博に話した。」  
「私をわかってから答えてくれるって」  
「はい、本当にそれから答えさせて下さい」  
「わかったわ。まずはね」  
「まずは？」  
「じっくりとお付き合いしていきましょう」  
「にこりと笑って淳博に告げた。」  
「それで御願いな」  
「はい、宜しく御願います」

「今からはじまるのよ」

こう淳博に告げた。

「私達はね」

「それじゃあ。二人で」

こうしてであった。二人ではじめた。そしてそれからだった。四年後二人は晴れて結婚した。お互いによく知った結果本当の愛を得たのである。

保育園の先生 完

2010・8・2

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6006q/>

---

保育園の先生

2011年2月2日23時21分発行